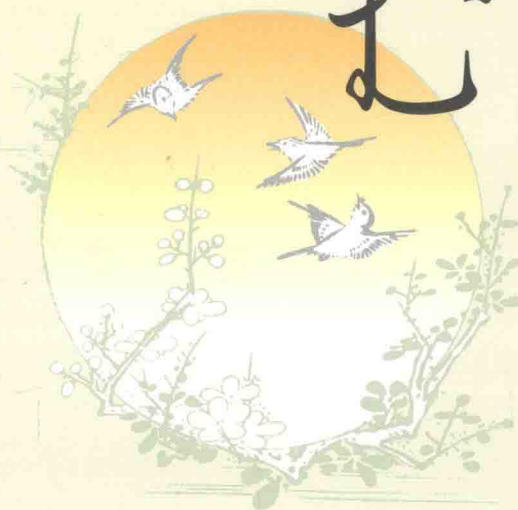
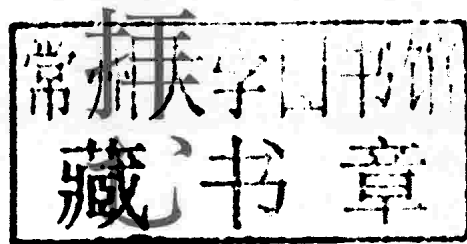


瀬上敏雄

いのちを 拝む



いのちを



瀬上敏雄

著者紹介

瀬上敏雄（せがみ・としお）

大正14（1925）年2月、岐阜県郡上郡白鳥町に生まれる。

昭和19年、陸軍船舶工兵として和歌山の部隊に入隊。

昭和20年8月15日、原爆の地広島にて敗戦を迎える。

昭和22年、中村久子先生と邂逅。

現在、大乘教常任理事。在家仏教協会評議員。「微風の会」副会長。俳誌「南風」同人。中部日本俳句作家会会員。

著書に『わが心の明珠』『こころの大地』『大いなるいのちの教え 法華經のことば』『一期一詩 〈こころの詩〉をよむ』、編著に『中村久子の一生 いのちありがとう』（すべて春秋社）。

挿絵…前田道雄

1937年、名古屋市に生まれる。名古屋市立工芸高校図案科卒業。

デザイナー。中日文化センター（写仏教室）講師。写仏・まこと会主宰。

いのちを拝む

2011年2月16日 第1刷発行

著者©＝瀬上敏雄

発行者＝神田 明

発行所＝株式会社 春秋社

〒101-0021 東京都千代田区外神田2-18-6

電話 (03)3255-9611(営業) (03)3255-9614(編集)

振替 00180-6-24861

<http://www.shunjusha.co.jp/>

印刷所＝信毎書籍印刷株式会社

製本所＝黒柳製本株式会社

装 幀＝本田 進

ISBN 978-4-393-10611-2 C0015

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

いのちを拝む

◎目次

1 苦難の中にこそ夢を

沈黙の伴奏 3 迷いには迷いの花 8 苦難の中にこそ夢を 12
遥かなる日のわが呼び名 16 未来の人に残すもの 20 父の残像 24

2 永遠の旅人

いのちの神秘 31 「いいか、わかったか」 36 永遠の旅人 40
生まれること、死ぬこと 44 一人には一人の光 48 勝者の理屈 52
帰らぬ永遠の日 56 因縁成就 60

3 人生のかくれん坊

誇りという哀しみ 67 如来の喜捨 70 生命あるものみな仏 74 戦友 78

人生のかくれん坊 82 肯定的人生 86 花は誰のために咲くのか 90

4 永劫の不戦を

兄の道、弟の道 97 永劫の不戦を 100 秋三題 104 音もせで来て濡れかかる 108
望郷の念に熱い涙 112 仏性みせた還らぬ友 116

5 天衣無縫の自由

新年迎える喜び込めて 123 シベリアからの帰還 126 心清浄なれば浄土を見る 130
戦艦「扶桑」からの帰還 134 宇宙を生きた賢治の愛 138
天衣無縫の自由 142

6 堂々たる無常観

人生の出会いの不思議

麦秋への回想 149 平和の鐘、広島に鳴りわたれ 152 老猫よ、安らかに眠れ 155
 子ゆえに迷う母の愛 159 男の子守歌 162 堂々たる無常観 166 八雲立つ出雲の鐘 169

人生の時の重み 175 この天然の音楽を 180 自然じねんほうに法爾 184
 芒野すすきのの太陽のごとく 188 故郷の山はありがたきかな 192
 人生の出会いの不思議 196 いのちを拝む 200 自己に遇う道 210

1

苦難の中にこそ夢を



1 苦難の中にこそ夢を

沈黙の伴奏

秋のいく夜か

藤原 定^{さだむ}

秋のいく夜かコオロギはしきりに歌っていた
おなじ草むらの中で

石は沈黙によって伴奏していた

ある夜 コオロギは石の下にもぐって死んだ

夜のどこかで蟋蟀こおろぎがすだいている。晩夏の暑さの中に秋がもうそこまで来ているのだ。そして蟋蟀はいく夜かを啼なきつづける。それは定めでもあるかのように――。同じ草むらの中の石は、声を持たないので、毎夜啼きつづける蟋蟀のために、ただ沈黙をもって伴奏をするしかなかった。そしてある夜、蟋蟀は石の下にもぐった。それはいく夜かを啼きつづけた蟋蟀の死であった。

仏教では「有情無情同時成道うじょうむじょうじょうどう」ということが説かれている。「有情」とは心を持ったすべての生命いのちあるものことで、「無情」とは、心を持たない草木国土のことである。一人の仏が世に出られると、「有情」の存在も「無情」の存在もみんな仏になることができるといわれる。平等大慧だいていの仏の慈眼じげんには、一切の差別がなくなり、みんな共に生かされている存在なのである。いく夜を啼きつづける有情の蟋蟀、沈黙の伴奏をする無情の石。この世のめぐり逢あいの不思議のご縁をいただいて、無心に生きる安らぎの姿がある。

ジュゼッペ・トルナトーレ監督の『海の上のピアニスト』という映画がある。

大西洋を果てしなく往復する豪華客船「ヴァージニアン号」の一等船客ホールのピアノの上に、捨てられていた赤ん坊。機関室に働く火夫に拾われたその捨て子は、^{あたか}恰も世紀の変わる一九〇〇年に^{ちな}因んで「ナインティーン・ハンドレッド」
一九〇〇、と名付けられた。

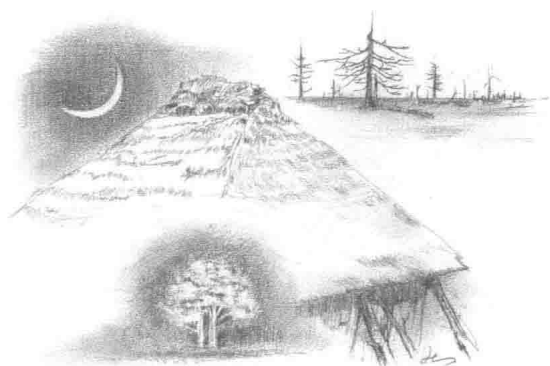
機関室で少年となった彼は、初めて客室へ行き、自分が捨てられていたピアノに出会う。そして成長した彼は、ピアノの鍵盤を自在に使い、即興の曲を弾いて、船上の人々に強烈な感動を与えた。船上で生まれ、戸籍にその出生を記されることなく、船を下りることのなかった彼は、素晴らしいピアニストでありながら、その存在を知られることはなかった。

美しい少女に逢った彼は、ある日突然に船を下りる決心をする。しかしタラップを下りてゆく彼の目に、ニューヨークの林立する摩天楼^{まてんろう}が飛び込んできた。彼は下船をやめ船に戻った。

「あの巨大な都会にすべてがあつたが、すべてのものの行き着く先が見えなかった。そこにあるものは際限なく無限に続く鍵盤であつた。無限の鍵盤で人間の

弾ける音楽はない。ピアノの鍵盤は端から端まで八十八と決まっている。無限ではない。弾く人間が無限なのだ」。

「この船の中で存在し、船と共に終わる。世界がこの船を通り過ぎて行くのだ」。船の舳先^{へそき}から艫^{とも}までの間に生きた彼は、そこに無限の音楽を奏でた一生であった。



迷いには迷いの花

万ばん
象しょう

八木重吉

人は人であり
草は草であり
松は松であり
椎しいは椎であり
おのおの栄えあるすがたをみせる

1 苦難の中にこそ夢を

進歩というような言葉にだまされない

懸命に無意識になるほど懸命に

各各自らを生きている

木と草と人と榮えを異にする

木と草はうごかず 人間はうごく

しかし うごかぬところへ行くためにうごくのだ

木と草には天国のおもかげがある

もううごかなくてもいいという

その事だけでも天国のおもかげをあらわしているといえる

「万象」とは、この天地間に存在する一切の形あるものことである。形あるものは、それぞれの与えられたいのちを生きる。人は人のいのちを、草は草の、松は松の、椎は椎の、あるがままの自分のいのちを生きているのである。

それは神とか仏と呼ばれる、いのちをいのちたらしめている根元こんげんの世界から、願われ祝福されて、おのおのの栄えある姿を示しているのである。それであるから、「進歩」というような言葉に決してだまされたりはしないで、ただひたすらに、懸命に、与えられた自分のいのちを生きているのである。

詩人はいう。「木と草はうごくかず、人間はうごく」と。本当にそうである。木と草は、真実の世界から願われ、祝福されてきたいのちを、無心に生きているから、もう動かなくてもいいのである、しかし人間は、自我の欲望の充足のため、さらなる進歩を求めて、人生を右往左往し、却かえって自分の中にある、自己のいのちの尊厳を見失ってしまうのである。しかしそれは「うごかぬところへ行くためにうごくのだ」と詩人はいう。

私は二十歳の時、広島原子砂漠の中で、無心に咲いていた名も知らぬ一本の草花に逢あった。人間たちが自分のための正義を振りかざして、この地上を生き地獄にしていた時、何の主張も抵抗もできない小さな草花は、自分のいのちをただひたすらに咲かせていた。もう動かなくてもいいところにいた。